同窓会会報

高知県立大学看護学部

第30号
令和7年3月31日発行

ごあいさつ

同窓会会長　中山 洋子

2025年は、二度にわたる寒波によって東北・北陸に豪雪をもたらし、2月末には大船渡市で大規模な山火事が発生し、災害が多い年の始まりとなりました。山火事は3月にも岡山市、今治市で発生しましたが、皆様の身近に被害に遭われた方はいませんでしたでしょうか。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。
桜の開花は間に合いませんでしたが、今年も3月21日に卒業式・学位授与式が行われ、看護学部71期生82名、大学院看護学研究科博士前期課程10名、博士後期課程6名、共同災害看護学専攻博士課程1名が学び舎を飛び立っていきました。卒業生・修了生には健康で修得した力を存分に発揮していただきたいと願っています。看護学部同窓会会員は、2025年3月で、2,900名となり、4月に入学する会員を加えると約3,000名になります。

今年は、看護学部同窓会にとって大きな区切りの年となります。看護学部同窓会と歩みを共にしている高知女子大学看護学会（2024年より高知県立大学看護学会）が50周年を迎えました。高知女子大学看護学会の発足は1976年で、看護学科/衛生看護学科の卒業生の研究発表と交流の場として作られました。日本看護科学学会の発足が1981年ですからそれよりも早い時期に看護学の学会を立ち上げたということになります。先駆者であった高知女子大学看護学科/衛生看護学科の先生方は、看護学が学問として成り立ち、看護専門職者を育成することを目指していたのだと思います。そして、この学会は、同時に看護学科/衛生看護学科の同窓生が集う同窓会としての役割を果たしていました。現在の看護学部同窓会は、2010年7月に設立され、学会を支援する組織として活動をしています。高知女子大学看護学会の会員の多くは、同窓会の会員でもありましたので、大学院修了生を中心とした「看護開発研究会」は、同窓会大学院部会の活動として学会の翌日に行われてきました。こうした経緯の中で、高知女子大学看護学会50周年記念事業は、看護学部同窓会、看護学部・大学院看護学研究科との共催で2025年7月19日・20日に開催されます。同窓生が先輩・後輩の壁を外し、“過去・現在・未来”の看護を語り合う機会となりますので、ぜひご参加ください。7月19日の夕方に看護学部同窓会総会も開催いたします。対面での総会は、2019年7月以来で、6年ぶりになります。参加が難しい会員もおられると思いますので、記念事業や総会につきましては同窓会の会報で報告をいたします。

同窓会の皆様と久しぶりにお会いできますことを楽しみにしています。

①同窓会会長ごあいさつ
②山崎智子先生　追悼
③岸田佐智先生　追悼
④ようこそ先輩！
⑤幅広い領域で活躍する修了生
⑥フレッシュに活躍する卒業生
⑦看護学部は今
⑧同窓会による学生・卒業生活動支援

山崎智子先生追悼

山崎智子先生 ご紹介

3期卒業生で、高知女子大学家政学部衛生看護学科にて、昭和41年（1966年）から平成6年（1994年）の28年間にわたりご勤務されました。第2代高知女子大学看護学会会長を歴任され、平成23年には同窓会第1号名誉会員となられています。

米寿のお祝い（2018年）

智子先生を偲んで

昭和41年入学。和井先生と山崎智子先生が担任でした。

病院実習が終わるとレポート提出。頑張って書いたので、てっきり内容を褒められたと思っていたら内容ではなくて読みやすいと。

私が兵庫県立看護学院で働いている時、学生募集のため急に出張を命じられて、高知に行きました。ホテルの予約もしていなくて、どうしようかと思っていたら、智子先生が我が家に泊まりなさいと言って下さいました。整理、整頓された部屋、私の布巾より白い雑巾。私の生活習慣を反省させられました。

大阪で同窓会が開かれた時、智子先生が来られるということで、同期生と二人で参加しました。かなりの高齢だったと記憶していますが、とてもお元気でした。高知市内で、クラス会があった後で、先生のお宅を訪問した時、とても喜んで下さいました。その時すでに健忘症になっていらっしゃいましたが、とても整理整頓された部屋でした。高知在住の人が色々お世話をしていたと聞いています。　（西濱法子さん：16期）

智子先生

卒業後も長い間みまもっていただき、本当にありがとうございました。

先生は私たちが入学した時の指導教官でした。授業に20人のうち10人しか出席していなかったり、試験で半数以上の学生の単位取得が危ぶまれる状況など一番手がかかった学年だったのではないでしょうか。それにも関わらず、卒業式前にはクラス全員を先生のご自宅に招待して手料理をふるまってくださいました。先生のお母さまと「はなちゃん」も一緒でしたね。

大学を卒業して、就職した病院から泣きついたとき「看護技術は1年もすれば大丈夫」と力強く励ましてくださったり、大学院（修士）への進学をご相談した時も背中を強く押していただきました。

しらさぎ会阪神支部の同窓会にも来てくださり、同窓会後有馬温泉で、懐かしく楽しい時間を過ごさせていただきました。先生に最後に直接お会いしたのは、三翠園で、還暦になった24期生の同窓会のときです。24期生ひとりひとりが先生に近況を聞いていただき本当よかったと今も懐かしく話しています。

先生から教えていただいたことはたくさんありますが、卒業生を大事にしていくこと、そして看護の仲間とのつながりをつくっていくことの大事さが心に残っています。先生が女子大を退職された年齢はとうに過ぎてしまいましたが、これからも先生の教えを心に刻みながら、日々を丁寧に生きていきたいと思っています。　先生のご冥福を心からお祈りいたします。　（上野昌江さん：24期生）

「私の羅針盤となった山崎智子先生」

私が結婚して上京したのは昭和57年5月でした。卒業後高知県で養護教諭として2年間働いたものの養護教諭に専門性を見出せず、新たに歩む道を保健師として定め昭和58年4月から東京都に就職することに決まっていました。ところが昭和57年11月、智子先生から突然電話があり、「六本木の東洋英和女学院中高部で養護教諭を探しているのよ。貴女、2年間の養護教諭の経験が生かされるし、とにかく学校保健が素晴らしいということだから採用面接に行ってちょうだい。私の姉がその学校の養護教諭と知り合いで女子大の卒業生がほしいとのことなのよ。貴女は学校保健をやりなさい。」とのことでした。

智子先生は私が大学3年生の時の担任でした。大学時代にはたいへん厳しい立派な先生という印象が強いですが、私個人にとっては私が進むべき方向性を示してくださった羅針盤です。自分の歩む道は若い時は簡単に決められるものではなく、智子先生からのお声掛けがなければ私の「学校保健への道」はなかったと思います。

年賀状には「帰省の折には顔をみせてね」と書いてくださっていましたのに、ただ一度しかご自宅へお伺いすることができず、定年退職の報告をしなければと思っているうちに訃報が届き大変残念です。

（宮崎恵美さん：26期生）

「山崎智子先生、ありがとうございました」

山崎智子先生、今まで本当にありがとうございました。智子先生には、大切なことをたくさん教えて頂きました。ある授業で、智子先生は「皆さんは、自分が出ようとした際に向こうから入ろうとする人がいたらどうしますか？」と質問されました。私達は「入り口は狭いから、自分が先に出て空間を空けます」「ドアを開けて、その方が入るのを待ちます」と思い付くことを答えましたが、なぜか智子先生は「そう」と言って質問を終えられました。母校で学生の前に立たせて頂いた時、40年前のこの場面を鮮明に思い出しました。あの時、智子先生は何を伝えようとされたのでしょうか。「今ならどう答える？」と考えること自体が、智子先生が意図されたことだったのかもしれません。また、智子先生にはたくさんのおいしいものも教えて頂きました。病院勤務時代、毎日先生にお会いしたことをきっかけに、智子先生宅で開かれるお正月会に声をかけて下さいました。智子先生手作りの伊達巻やゴマメ、栗きんとんなどを頂き、作り方も教えてくださいました。こちらはプロ級すぎて、教え子にはなれずじまいです。いつも智子先生は、教え子や同僚の皆様のことを「頑張っているわね」「元気かしら」と気にかけながら、楽しそうにワインを召し上がっていました。今でも母校のことを見守って下さっているように思います。智子先生のご冥福を心よりお祈りいたします。（豊田邦江さん：30期生、修士1期生）

高知県立大学同窓会総会・懇親会（2016年）

山崎智子先生のご自宅にて
（豊田さんご提供）

岸田佐智先生追悼

岸田佐智先生 ご紹介

高知女子大学家政学部衛生看護学科25期生としてご卒業され、助産師国家資格取得後、助産師として臨床経験を積まれました。
その後、母校である高知女子大学で教員として15年間ご勤務され、母性看護学領域を中心に看護学部の発展にご尽力されました。
高知女子大学を退任されたのちは、徳島大学医学部で教鞭をとられ、2022年4月には徳島大学名誉教授となられています。

25期生よりご提供→
上列右端が岸田先生

追悼文

～高知女子大学家政学部衛生看護学科25期生を代表して～

私たち看護学科25期生は昭和54年3月の卒業です。岸田さん(以下、「佐智さん」と記載)は、母性看護学実習で初めて分娩に立ち会い生命の誕生に感動して、卒業と同時に京都大学医療技術短期大学部に進学して助産師になりました。約3年臨床経験を積んでから聖路加看護大学大学院修士課程に進学し、その後は高知女子大学で約15年間教鞭をとっておられましたのでご存じの方も多いかと思います。女子大を退職後は兵庫県立大学大学院博士課程に進学、同時に徳島大学で母性看護学の教授として勤務し、65歳退職時は名誉教授の称号を得ています。

佐智さんの人となりは一言でいうと正義感に溢れていること。また、努力家であり、高校卒業までに華道、書道、珠算等は免許皆伝にほぼ到達していました。その彼女をずっと支えておられたのはお母さん、おっとりとした包容力を感じさせる方でした。佐智さんは徳島大学に勤務して2、3年経った頃から自身闘病生活が始まり、仕事との両立は大変だったと思います。一方、お母さんは徐々に認知機能が低下し施設の利用をせざるを得なくなりましたが、毎週末徳島から高知に帰ってきてお母さんを見舞い、退職後はすぐに自宅に引き取り、約2年間在宅看護に徹しました。佐智さんが明るく大きな声で話しかけると、お母さんが満面の笑みを浮かべる姿が忘れられません。

お母さんを看取った3ヶ月後に、佐智さんも天命を全うされました。自分の役割をきっちりこなして旅立っていった彼女に敬服しています。ご冥福をお祈りいたします。　（足利幸乃さん・五十嵐恵子さん・角谷広子さん）

岸田先生との思い出

私が4回生の時に岸田先生は高知女子大に赴任されました。先生は修士を修了されたところで、自分たちの代が岸田先生の教え子１期生となります。母性看護学で卒論を取っていたので、先生には実習と卒論でご指導いただきました。その親しみやすい人柄もあり、卒論メンバー内では先生のことを（失礼ながら）「さっちゃん」と呼んでいました。

卒業後も、助産学校進学や臨床で気になっていること等、話を聞いていただき、何かあれば頼れる心強い先輩であり、顔を見るとほっとした気持ちになる存在でした。また私が他大学で助手をやっていた頃、科学研究を一緒に行う機会があり、高知に伺って研究会議をするなど、充実した時間を過ごしたことも懐かしい良い思い出です。

徳大を退職され高知に戻られて、これからは高知に行けば岸田先生にお会いできると喜んでいたのに、もう高知に行っても岸田先生にお会いできないことがとても寂しく残念でなりません。

岸田先生、本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。　（増井耐子さん：34期生）

岸田先生との思い出

5月22日徳島の友人から岸田先生の訃報を知らされました。突然のことで驚きましたが、同級生が大学に戻り高知で集まろうと話していたので、岸田先生に招かれていると感じた私達は御霊前にご挨拶に伺いました。先生のお姉様から、お仕事をされながらお母様や山崎智子先生のお世話をされていたこと、また癌を患いながらも旅行に行かれたり、ご自身の遺影に納得いかず写真館を2つ回られたお話をお聞きしました。はちきんな先生らしいなぁと感じました。

私達母性グループは他に行き場がない学生が集まったグループでした。卒論のテーマは「青年期の父性意識」でした。現在、保健師として新生児訪問をしています。最近は育休をとる父親が増え、両親学級も父親の参加が多いです。出産後からの父親の育児参加が母親の心身の負担軽減におおいに貢献している事、育児に大変効果がある事を身にしみて感じております。

学生時代に卒論のテーマとして青年期の父性意識を学んだ事は今とても役に立っています。突拍子も無い難しいテーマを、叱咤激励しつつ根気強く指導してくださった岸田先生に感謝しています。他の先生方が頭を抱えるような言動をした時も、岸田先生は笑って許容してくださいました。

完成時に先生と一緒にお祝い会をし、勢いでトップワン四国のお宅にお邪魔しました。私達の若気の至りを受け入れて付き合っていただけたことは、今も私達の最高な思い出です。指導教官としてだけでなく、母や姉のように接してくださっていました。私達が今も看護師を続けているのは、あの時の厳しくも楽しい時代が糧になっています。

岸田先生に深謝申し上げるとともに、御霊のご平安をお祈り申し上げます。

（浦本潮美さん・妹尾悦子さん・松原佳子さん：41期生）

岸田先生の教え

岸田先生には学生時代の母性看護学に関する教えはもちろんのこと、教育・研究者としての歩みにもかかわる教えを受けました。中でも「考え続けること」というメッセージをいただいたことが、今でも鮮明な記憶として残っています。

大学4年時に取り組んだ看護研究で岸田先生にご指導いただいた際、データを前に途方にくれている私たちに「寝ているときも、お風呂に入っているときもずっと考え続けるのよ」と笑いながら話してくださいました。当時の私たちにとって明確な答えではなかったものの妙に納得ができ、今でも研究の問に対する向き合い方としてこの教えが頭にふとよぎります。

助産師の道を選択する際にも、岸田先生は「学問としての助産を学ぶこと」を教えてくださいました。助産のスキルではなく探究する学問として学ぶこと、その言葉に背中を押され学びの世界を広げることにつながったと実感しています。

岸田先生が示してくださった教えである知的探究のマインドを次の世代へとつないでいくことが、教え子であり同窓生である私たちの使命であるとも思っております。岸田先生のご冥福をお祈りしつつ、高知県立大学看護学部の教員として今後も研鑽を積んでまいります。

（嶋岡暢希さん：38期生）

ようこそ先輩！

同窓の皆さまに支えられた35年間
遠藤久美さん （36期生）
静岡県立静岡がんセンター　看護部長/がん看護専門看護師

高知女子大学を卒業してから、気がつけば35年の歳月が流れました。寄稿の機会をいただき、改めて高知女子大の同窓の皆さまとのつながりを実感しています。

卒業後、都内の大学病院で看護師として5年間勤務しました。病棟は違いましたが、大学時代にマンドリンクラブで共に過ごした同期がいたことは、本当に心強かったです。

その後、短大の看護学科で助手を2年間務め、そこで出会った大先輩の先生方に教育の基礎を学びました。特に大学院進学を勧めていただいたことは、私の看護師人生を大きく左右する重要な転機となりました。がん患者さんと関わる中で漠然と興味を持っていたがん看護。ちょうど専門看護師制度がスタートした時期で、がん看護のコースがあると知り、兵庫県立看護大学大学院の1期生として入学しました。大学院でも高知女子大の先輩・後輩と共に学び、多くの刺激を受ける日々でした。大学の時に先生方がおっしゃっていた「看護は科学よ！」という言葉が身にしみる2年間でした。

修了後は地元である静岡がんセンターに就職し、がん看護専門看護師としての活動をスタート。ここでも先輩・後輩に支えられ、学会などを通じて多くの同窓の方々と交流する機会が増えました。

私の看護師としての歩みの中には、常に大学の先生や先輩、同期、後輩とのつながりがあり、多くの励ましや助言をいただきながら進んでこられたことを改めて実感します。看護の道を歩むうえで迷ったとき、苦しいときに支えてくださった方々の存在が大きく、感謝の気持ちでいっぱいです。

現在は管理職にも携わることになり、2023年度から看護部長の職責を担っております。専門看護師として患者さんに直接関わる機会が減ったのは寂しいですが、看護師ががん看護の醍醐味を感じられる環境を整えることが今の使命だと考えています。

これからも、同窓の皆さまとのつながりを大切にしながら、看護の道を歩んでいきたいと思います。皆さまのご活躍を心から応援しております。そして看護部長として、後輩の皆さまが就職してくださることを心待ちにしております。

高知女子大学看護学会　50周年記念事業のお知らせ

メインテーマ『歴史を踏まえて未来の看護学をデザインする』

高知女子大学看護学会50周年記念事業を下記の日程で開催します。
記念講演、記念シンポジウムなどを企画しております。

日時：2025年7月19日（土）・20日（日）
場所：高知県立大学池キャンパス

50周年記念事業詳細につきましては、同封のチラシをご覧ください。
また、50周年記念事業開催にあたり、寄付金のご協力もお願いしております。
詳細は同封の趣意書をご覧ください。

高知県立大学看護学会ホームページはこちら
https://www.u-kochi.ac.jp/~nsgakkai/

祝賀会の開催
7月19日（土）の同窓会総会のあと、祝賀会を開催します。
場所：三翠園　桜の間
高知市高知市鷹匠町1-3-35
時間：18:30～20:30
会費：8000円

同窓会総会は、17:30～18:00に三翠園で行います。
同窓会の懇親会については、今年度は50周年記念事業の祝賀会と一緒に行うようにいたします。
皆様のご参加をお待ちしております。

幅広い領域で活躍する修了生

藤野崇さん（修士6期生）
学校法人近畿大学　近畿大学病院

基礎の大切さを教えてくれた大学院での日々

私は、修士6期生として高知女子大学(現高知県立大学)看護学研究科に入学しました。看護学研究科初の男性の大学院生として、暖かく迎えていただいたことを懐かしく思い出します。これまで大阪にしかほとんど住んで居なかった自分には、高知の風土も、力強く、明るく、お酒にとても強い方が多いこともとても新鮮で、とても楽しい2年間を過ごしました。

大学院時代は、野嶋佐由美先生に師事し、数多の薫陶をうけました。学問の面において多くのことを教えていただいたこともちろんですが、先生の資料の作成への参加など、突然ではありますが自分では思いもつかないような課題をいただくなど、大学院で学んだこと＋αを求められるような、多様な挑戦の機会と指導をいただいたことは、とても刺激を受ける経験でした。また先生には学問への向き合い方なども多く教えていただきました。これまで看護学の知を積み重ねて下さった方々の恩恵の下に今の学びがあり、その発展に寄与することの責任を自覚するようになったのも、「あなたたちは巨人の肩にのっているのだ」という先生のお教えからでした。

現在、私は近畿大学病院看護部の継続教育部門で勤務しています。家族支援専門看護師の資格を活かして、家族支援に関する実践や相談にも関わりますが、本務である教育システム作り・人材育成だけでなく、看護部の倫理カンファレンスの支援、院内の倫理コンサルテーションチームへの参画、ACP促進のための委員会への参画、看護研究の倫理審査と研究支援などの役割も担っています。大学院終了後、徐々に役割を拡大し、現在のような役割を果たすようになりましたが、どの役割一つをとっても、大学院で学んだことが基礎となっており、改めて大学院の学んだことの大きさを感じています。

病院で勤務するということは、患者家族の方々に質の高い医療を提供することに責任を持つことだと思っています。現在は管理職となったため、自分が実践する機会は減りましたが、その代わり組織として実現するという新たな挑戦の機会を得ることとなりました。大学院で学んだ科学的な考え方を活かして、これからも責任を持って役割を果たしていこうと考えています。

松森美和さん（修士19期生）
医療法人須藤会土佐病院

2018年の3月に博士前期課程を修了しました。在学中は色々な出会いや学びがあり大変刺激を受けたことを覚えています。刺激を受けたことで、初心に返り在学中に所属を変わるという事態に発展してしまい、多くの人を驚かせ、またご迷惑をおかけしたことも、今となってはいい思い出です。

入学当初、高知医療センターの救命救急センターICU（以下救命ICU）で副科長をしていた私は、ICUにおいて教育するべきは何か、何を教えるとスタッフの成長に効果的かを考え、悩む日々でした。その悩みを解決するために、進学を決意し、「救命救急センターICUにおける看護師の臨床判断」のテーマで研究に取り組む事になります。今、研究テーマを見ると、本当に狭い世界にとらわれていたのだなと感じます。看護師人口は2020年時点で173.4万人だそうです。その中で、3次救急の、更にICUに勤める看護師がどの程度居るか、重箱の隅をつつくような研究になるけど、それでいいのか？と教授から何度も確認されたことを思い出します。当時はそのために進学したので、それ以外の研究テーマは全く思いつかず、とにかくこのテーマで突き進むしかないと必死でした。

研究テーマは頑なに変えませんでしたが、著名な先生方の講義を受け、同期の仲間とディスカッションを繰り広げるうちに、私自身は元々看護師になった経緯を思い出すことになります。在宅での看取りや、終末期の看護に興味があったことなど、過去の看取りの経験も含めて思い出し、当時の所属やこれからの進路について、私がやりたかったこととは違うと思い至りました。そして、これから高知県で在宅の分野に進出したいと考えるなら、精神科看護の経験も積みたいと思い、在学中に今の職場である土佐病院（精神科単科174床）に移りました。当時の上司には多大なるご迷惑をおかけしましたが、スタッフ共々笑って送り出してくれました。

精神科領域に来てから、ICLSコースのインストラクターの資格を取得、最初は当院で仲間と共にコースを立ち上げ開催し、今では日精看高知県支部ICLSコースを開催できるまでになりました。また、心停止を回避するために何をすればいいかを学ぶコース、INARSコースのインストラクターも取得、精神科救急学会で併設コースのコーディネートをしています。これまで経験してきたこと、出会った人、支え合ってきた仲間の存在、そのどれもが今の私を形作っています。これからも感謝を忘れず、邁進していく所存です。

フレッシュに活躍する卒業生

「看護師として働いて」
名古屋市立大学医学部附属東部医療センター
林　美奈さん　（70期生）

看護師として働き初めて、もうすぐ1年が経ちます。職場の環境には慣れてきましたが、まだまだ勉強の毎日です。書面学習を日々続けてはいますが、いざ実践となると分からないことも沢山あります。ですが、私が大学で学んだ事も実践に大いに活かせています。どんな知識や経験も実践に役立つと思い、積極的に学び、さらなる躍進を目指しています。日々看護を行う中で怖い先輩や技術・知識不足による不甲斐なさ等で心折れそうな事もありました。そんな時私はゆっくりリフレッシュする事を意識しています。冷静になった状態でその時を振り返り、やるべきだった事等を振り返り、次に活かしています。3月から部署内異動があり、主科が多様な部署に行きます。また勉強の毎日ですが、患者さんが安全で安楽な入院生活を過ごす事ができるよう、挫けずに前向きに頑張りたいと思います。

「養護教諭として働いて」
大洲市立三善小学校
竹村　優花さん　（70期生）

養護助教諭として小学校に勤務してから1年が経ちました。初めの頃は、分からないことばかりで、とても慌ただしい毎日でした。しかし、周りの先生方や養護教諭の先輩方に助けていただきながら少しずつ仕事にも慣れてきました。

私が養護助教諭として働く中で、とても大切だと思ったことがあります。それは、子どもたちの話をしっかりと聴いてあげるということです。勤務している学校では、頭痛や腹痛を訴えて保健室に来室する児童が多くいます。初めは頭痛や腹痛などを訴えていた児童ですが、話を聞いているうちに本当は友達とけんかをしてしまった、算数の授業を受けたくないなど、身体症状の裏に悩みや児童の本当の思いがあるということに気づきました。子どもたちは、悩みなどを抱えていたとしてもそれを上手く言葉にできず、身体症状で訴えてくることがあります。そのため、養護教諭として子どもたちの話にしっかりと耳を傾け、本当の思いや気持ちを理解してあげることがとても大切だと感じました。子どもたちの心にしっかりと寄り添うことができる養護教諭を目指して、これからも頑張っていきたいと思います。

「助産師として働いて」
高知県立あき総合病院
足達　海音さん　（70期生）

とても大切に育てていただいた先生方のもとを卒業して、早1年が経ちました。

私は助産師として就職し、分娩介助や褥婦・新生児のケアおよび指導、切迫早産の入院管理等に携わらせていただいています。入職して数か月の頃は、できないことばかりで先輩に確認しないと行動できない自分に無力感を感じ、これでいいのだろうかと不安なことも多くありました。しかし、周囲の方々に恵まれ、優しくご指導いただき本当に少しずつですができることが増えていきました。そして大学で先生方や友人とずっと考えてきた「産婦や家族にとって良いお産体験にする」ということを意識して1件1件の分娩介助に入ることで、「居てくれて安心した」「担当してくれてよかった」など嬉しいお言葉をいただくこともできました。また実習で身につけた毎回分娩を振り返るという習慣のおかげで、決して多くはない分娩件数のなかでも毎回できたことと課題点を見つけ、次の分娩介助に活かしていくことができています。

私の病棟は混合病棟であるため他科の患者を担当することも多くまだまだ苦戦することもありますが、自分の大切にしたい助産師としてのあり方を忘れず、自己研鑽を続けていきたいと思います。

「保健師として働いて」
愛媛県四国中央保健所　保健課　精神保健係
西村　彩希さん　（70期生）

入職して、あっという間に1年が経ちました。1年とは思えない程のケース対応や事業、公務員の事務作業等、濃く充実した時間や経験をしています。私は精神保健全般の相談対応や訪問、受診支援等々に携わっています。他の県・市職員や保健所、市の保健師、警察、病院職員の方々をはじめ、多くの方と協働しながら日々目の前の仕事に向き合っています。

令和6年度に精神保健福祉法が改正された中、大学で学んだことを実践に生かすことの難しさを痛感しています。今は地域移行支援事業をしていますが、地域課題の発見及び課題解決に向けた取り組みに苦慮しています。他にも、鳥インフルエンザ対応にも参加し、防疫対策の重要性を改めて実感しました。職場の上司からは、「常に事例から学ぶ」ことを教えていただき、何一つ同じ事例がない中で、1つ1つ丁寧に学習しながら知識や技術向上に向けて更なる自己研鑽が必要だと感じています。

プライベートについては、大学時代の友人と定期的に電話したり会ったりして、近況報告も含めリフレッシュしています。2年目になる事実にまだ受け止め切れていない現在ですが、初心を忘れず、謙虚な姿勢でこれからも一生懸命取り組んでいきたいです。

看護学部は今

ボランティア活動について

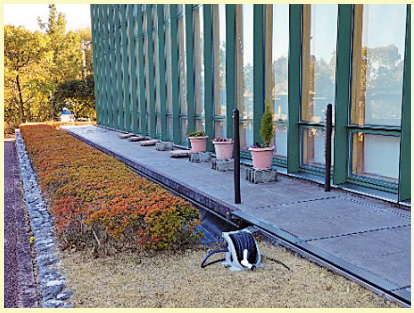
ボランティア委員　中井あい　前田愛友香

看護学部では、教員と学生がボランティア活動に参加し、学生の多様なボランティア活動をサポートしています。新型コロナウイルス感染症の流行により2020年度以降、学生ボランティア活動が中断していましたが、5類に移行以来、少しずつ学生ボランティア活動が再開となっています。2024年度は高知医療センターでのボランティア活動が再開となりましたので、ご紹介したいと思います。

高知医療センターにおけるボランティア活動として、学生はハーモニーこうちで活動しています。今年度は数年ぶりの活動でしたので、実際に可能な活動内容、活動時期などについて関連機関の方々と調整を重ねてまいりました。さらに、活動再開に合わせて、大学内では学生を対象にガイダンスを実施しました。大学内のガイダンスでは、車いすの実技や視覚障がいをもつ人へのガイドの実際について事前学習で得た知識を体験することで、態度や技術について学びを深めました。初めての実技体験でしたが、ガイドする側ガイドされる側から気づいたことや考えたことを共有しました。さらに、高知医療センターのガイダンスにも参加し、講義と院内見学をとおして、病院でのボランティア活動の心構えや現地における活動についてもイメージをもつことができ、理解を深めることができました。

実際に行った学生のボランティア活動として、花壇の整備や玄関前の清掃活動を中心に活動させていただきました。11月からの活動再開となりましたが、高知医療センターのご担当者の方々、各部局の皆さま方にサポートいただきながら活動できました。綺麗を保ったり季節によって植物の変化を楽しんでいただけるよう活動するなかで、ボランティア活動中に、「お疲れ様です」「ありがとう」という言葉を多くいただき、地域の方々との挨拶やちょっとした会話などのコミュニケーションがとれたように思います。病院に来られる方々とボランティア活動をする人とを繋いでいるようにも感じました。

今後も学生の主体的な活動を支援しながら、活動を続けていきたいと思います。



看護技術習得のための自己学習室の整備

看護学部では、学生の皆さんが主体的に学習に取り組めるように、自己学習環境の整備を行ってきました。そしてこの度、看護技術習得のための練習ができる自己学習室が完成しました。卒業までには様々な看護技術を学びますが、それらを患者さんに安全・安楽に実施できるようになるには、繰り返し練習し手技に習熟することが必要です。しかし、実習室は正課の授業に使用することが多く、これまでは学生の皆さんが空き時間を活用して自由に技術練習をすることが難しい状況にあり、看護技術が実践力として定着しない、臨地実習での実施に自信が持てないといった課題が生じていました。そこで、看護学部棟1階エレベーターホール前のスペースを活用し、臨床において実施頻度の高い看護技術を常に練習できる場として整備することにしました。

「ナーシングスキルトレーニングルーム（Nursing Skills Training Room）」と名付け、室内には血圧測定シミュレーター、胸部聴診シミュレーター、ベッド、CPS装置（酸素吸入と吸引が使用できる装置）、モデル人形などを設置しています。主に血圧測定、呼吸音聴診、酸素吸入、吸引、体位変換、更衣、清潔ケアなどの練習をすることができます。血圧測定シミュレーターでは、測定結果を入力し正確に測定できたかを確認できるだけでなく、加圧・減圧の状況をグラフで可視化し振り返りに活用することができます。また、胸部聴診シミュレーターでは、正常呼吸音と様々な異常呼吸音を聴取することができます。使用できる時間は平日の午前9時～午後6時の間で、事前予約は不要、空いていればいつでも使用可能ですので、気軽に利用できます。

2024年11月より運用を開始し、2月末までの4ヶ月で延べ127人が利用しました。ほとんどが技術テストに向けた練習での利用でしたが、学生さんたちが声を掛け合いながら、活き活きと練習している姿が見られました。写真のとおり、廊下側がガラス張りになった部屋ですので、練習している様子が廊下から見え、教員と学生の双方が声をかけやすい環境になっています。懸命に練習している姿は、他の学生さんにも教員にも刺激になります。授業前後の自己練習や、臨地実習前のトレーニング、卒業前のブラッシュアップなど、学生の皆さんに日常的に活用していただけるよう、今後も“ちょっとやってみよう”という自己学習意欲を引き出す支援をしていきたいと思います。

同窓会による学生・卒業生活動支援

令和6年能登半島地震復興支援ボランティア　2024.夏

看護学部　二回生　眞澁桜花

イケあい地域災害学生ボランティアセンターでは日頃から、南海トラフ地震が起こった時、自分たちが地域とボランティアをつなぐ窓口となることをめざして、地域の活動や防災イベントに参加しています。みさとフェアの運営に協力参加したり、高知市で行われる防災イベントでは子ども対象の防災クイズを行い地域との交流と防災意識の啓発を続けてきました。

令和6年1月、能登半島地震の発生を受け、石川県出身の在学生が看護学部にもいたことから、なんとか支援に伺えないかを模索し、5月に金沢出身の3回生の先輩を中心に先遣隊に入ってもらいました。その後、輪島市の支援を行っていたJOCA（青年海外協力協会）にご縁が繋がり、9月には1・2回生を中心に10人が2グループに分かれてボランティアに入ることができました。仮設住宅への移行に伴い、住民同士の交流も希薄になっているということで、私たちは仮設住宅の集会所や近くの公民館で集いの場を設け、パラリンピックで有名になったボッチャと、ちぎり絵、ハンドマッサージ、簡単にできる蒸しパン作りを行いました。参加者は、仮設住宅に暮らす高齢者が主で、「みんなと楽しめる機会があると嬉しい」「若い人と話したら元気が出た」「楽しかった。また来てね。」と喜んでもらうことができました。

活動中は、発災時の様子や避難生活についても詳細に聞かせていただき、災害の怖さや避難生活上の困難について、理解が深まりました。ある方は、「みんなが辛い思いをしたのだから、私のところは家もあるし家族も無事だし、大したことはないんだけどね」と話しつつも、それでもやはり辛い、と気持ちを吐露されていました。参加してくださった方々は明るく見えましたが、話を聞くと皆さんそれぞれに過酷な体験をされており、進まない町の復旧に葛藤する日々であることを語ってくださいました。地震発生から9カ月が経過した現地でしたが、まだ被災したことを受け入れられない人と復興に向けて動き出している人が混在している状況でした。今回の活動に参加してくれた方々は、復興に向けて動き出せている人々であったと思います。今後は引きこもっている人や前を向くこと、進み出すことができない人が1歩を踏み出せるような支援が必要になると感じました。

また、後半グループが帰高する日、輪島市は奥能登豪雨によって更なる被災をしています。早朝から土砂崩れ警戒警報が発令されたため私たちは予定を早めて帰路に就き、直接被害を免れましたが、自分たちの思い入れのある場所の更なる被災には、帰高してからも現地で出会った方々の安否が心配でした。この体験は、思い入れのある場所が被災したことで「また訪ねたい」と思う「未災地ツアー」の体験ともなりました。今回の貴重な経験を、南海トラフ地震に備える今後の活動にも活かしていきたいと思います。

なお本活動に際しまして、看護学部同窓会には多大なるご支援を頂きました。ご支援のお陰で、機動力を生かし、他のボランティア団体が入らない地域にまで伺うことが出来ました。有難うございました。

海外大学との短期派遣研修

コロナ禍で、停止していた海外大学との短期派遣研修、短期研修受け入れが5年ぶりに再開しました。

令和6年9月2日（月曜）から9月10日（火曜）に「異文化理解看護フィールドワーク」の演習として、高知県立大学の国際交流協定校であるインドネシアの国立ガジャマダ大学の看護学科での短期派遣研修を行いました。研修の目的は、ガジャマダ大学学生との交流を通して、異文化および自文化の理解、自身の立ち位置を把握する力や異文化環境での耐性等を高めていくことでした。参加者は看護学部の2回生4名と1回生4名で、2名の教員が同行しました。

9月3日の研修初日は学生間交流（ガジャマダ大の学生15名参加）で、本学の学生がパワーポイントで自己紹介や高知の様子の紹介、日本の医療に関わる課題、折り紙を紹介し、動画を使って一緒に折り紙をしました。その後ガジャマダ大の学生さんがキャンパスツアーをして下さり、広い敷地と一番古い本部棟を一緒に散策しました。

9月4日以降は、ガジャマダ大学看護学科のAlim先生による①インドネシアの医療制度と健康課題、②簡単なインドネシア語とインドネシアの文化について英語での講義の受講、ガジャマダ大学アカデミックホスピタル見学、保健所（Puskesmas）の見学、市町村保健センター（Posyandu）の活動見学をしました。村の集会所で行われていた高齢者健診では、バイタルサイン測定、腹囲測定、血糖測定のほかチェックシートを用いて、ADL、 メンタルヘルス、生活状況についてスクリーニングを行い、必要に応じて医師の個別相談、保健所への受診勧奨を行っていました。女性の村長さんが現場を仕切っていて、帰りには野菜詰め合わせセットをお土産にしていたのが印象的でした。

学生間交流では、チューターの学生さんと一緒に、ムラピ火山フィールドワーク、クラトンパレス（旧王宮）見学、ボルボドゥール遺跡の日の出見学と遺跡見学もしました。ボルボドゥール遺跡は8世紀後半に建てられた仏教寺院（インドネシアは85～90%がイスラム教徒であり、仏教徒は0.4%）ですが、密林の中、火山灰に埋もれており19世紀に発掘されたそうです。遺跡保護には日本の資金と技術協力が大きく、現在は観光資源であり世界遺産にもなっています。ただ、遺跡の保護やオーバーツーリズム回避のため、入場制限があるほか、外国籍の入場料はインドネシア人の4倍近くであることに驚き、文化の違いを感じました。

令和6年10月28日（日曜）から11月4日（月曜）に、今度はインドネシアで本学の学生をサポートしてくださった学生さん5名と引率教員1名が、看護学部に短期研修に来られました。日本の医療・看護についての講義、高知医療センターの見学、高知市保健所で保健所の役割についての講義と見学、内田脳神経外科病院に伺い、インドネシア人の看護師さんたちとの交流等を企画しました。引率教員であるAliana先生には看護学部教員と大学院生を対象にした「Nursing Indormatics（看護情報学）」の特別講義をしていただきました。 11月2日（土曜）、3日（日曜）は、高知県立大学の学生とガジャマダ大学の学生が一緒にバスハイクに出かけ、いの町和紙漉き体験をしたり、日曜市や高知城を一緒に散策し、交流を深めました。

看護学部では、これからもガジャマダ大学やその他の交流協定校との国際交流を進めていきたいと思います。

令和6年度　高知県立大学看護学部 4回生看護研究発表会

令和6年度　高知県立大学看護学研究科 博士前期課程修士論文発表会

令和7年3月3日、看護学部4回生の看護研究発表会が開催され、3月8日には、看護学研究科博士前期課程の学位論文発表会が開催されました。それぞれの領域において、看護研究で探求してきた成果を発表されました。

ご寄付をいただいた方

西山純子様（33期生）・佐藤美穂子様（18期生）・多田邦子様（32期生）・
佐藤美穂子様（26期生）・山田薫様（26期生）・加藤昭尚様（M15期生）・
中島紀恵子様（4期生）・角谷広子様（25期生）・藤田冬子様（D4期生）・他匿名希望
上記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。（令和7年3月31日現在）

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

編集後記

3月23日、高知県と熊本県で、全国一番目のソメイヨシノ開花発表がありました。新しいことが始まる季節、皆様はいかがお過ごしでしょうか。

本号では、長年にわたり母校を支え続けてくださった山崎智子先生・岸田佐智先生への感謝の気持ちを込め、追悼メッセージを掲載しております。また、同窓生の近況や看護学部の現在の活動などについても掲載しております。

本同窓会会報では、同窓生の皆様のご活動なども掲載していきたいと考えておりますので、同窓会を開催した等の情報、会報の感想などをぜひお寄せください。

池添・西内・池内

表紙の写真：土佐市波介川の菜の花

ホームページアドレス

高知県立大学看護学部同窓会
http://www. u-kochi.ac.jp/~kango-og/

事務局

〒781-8515　高知市池2751-1　高知県立大学看護学部
Fax：088-847-5524
メールアドレス：kango-g2020@cc.u-kochi.ac.jp